B 152　山形県に残る外被　合羽と角巻

山形県立米沢女短大　徳永幾久

目的　県人口の八割が農家である山形県では大正期に入っても上方の袖合羽や洋風のマント　トンビ　インバネス等の外被は庶民の間では高嶺の花で　江戸期から着られてきた木綿合羽に東北では珍らしい絣地を表に裏には手前織をつけて男女共使用した。明治20年以後外国の高価な毛織物フランケットの国産品が国内でも大規模に生産されるようになり都会でもフランケと稱して肩掛に流行したが　シール等の織物の発展により長方形肩掛がこれに代り　18mに及ぶフランケは上端を二つ折にして身体をまとう角巻と稱されて地方に普及した。本報は戦後も着用された合羽と角巻についてその着用実態を考察する。

方法　既存文献並びに収集実物により検討

結果　江戸期より着用されてきた合羽は　衿ぐりや前重りが大きく雪の中で荷や子供を背負うのに機能的で愛用され嫁入道具ともなった。明治11年以後ルイ14世のカシミヤシヨールに源をもつというスペイン風外来シヨールが輸入され　20年には和服用大型肩掛（シヨール）として上流婦人間で流行し30年には毛布を二つ折にし肩にかけるハイカラスタイルが出来た。このスタイルはややおくれ地方に模倣されたが　赤ケットはハイカラものと田舎人は上京用に使用したのでその呼稱にされた。角巻は名の如く毛布を身丈に合わせ二つ折にして着用する。三角折にすると前後中央が長くなり雪に裾をとられ歩かれず肩から上る。又角巻は片手で前をかき合わせての着用なので主に頭からすっぽり被って着用した。

合羽　角巻何れも外国服物模倣の品が東北の最も文化の遅れている生活の中で消化されいつの間にか東北を代表する民俗服物となったことは誠に興味深いことである。